

コミュニケーションの研究と倫理

木村祐哉[†] (ヤマザキ動物看護大学准教授/
獣医コミュニケーション研究会
(NDK:農場どないすんねん研究会) 会長)



1 はじめに

2022年に開始された連載企画「獣医療とコミュニケーション」も本号をもって最終回となる。表1のとおり、獣医師に限らないさまざまな職域の執筆者により、多岐にわたり関連する話題が紹介されてきた。それぞれの現場で業務を行う際のクライアントやスタッフとの対人コミュニケーション、行政などの大きな視点で必要なマクロコミュニケーション、職場内の人間関係やメンタルヘルスも含めたマネジメント、そして獣医学教育の中にコミュニケーションが盛り込まれるに至った現状など、すでにご存知の内容もあれば、体感としてはありつつも頭の中で整理されていなかった内容、全くもって初耳だったという内容もあったことと思われる。

このようにコミュニケーションは多分野に及ぶ学際領域のため、先んじて発展した人医療でもいろいろな場面に登場するが、医学教育学や医療マネジメント学などの中で扱われていることが多い。筆者自身、医学研究科で医学教育学を専門とする研究室で学んだことが、この世界に足を踏み入れるきっかけになったと考えている。しかし、本邦の獣医療ではそれらを扱う学術組織の誕生には至っておらず、経験談から発展させ、科学的根拠として積み重ねるための土壌が整っているとはまだ言い難い。そこで本稿で獣医コミュニケーションを研究するためのアプローチや課題について、学術の導入として大まかに述べ、連載の締めくくりとしたい。

2 研究方法論

コミュニケーションの研究は人文科学的な側面が大きく、個々人の認識や考え方、感情など内面世界を知る必要があることから、主観的で、また文脈によっても変化しうる流動的な内容が多い。これは自然科学的な研究に

精通した方々ほど奇異に感じられることであろう。しかしその反面、そのような方々もまた人間社会に生きており、このような領域が重要であること自体は同意いただける場合がほとんどである。すなわち、人文科学的な研究の意義には異論がないものの、その研究手法に馴染みがないから不適切に見えているのであって、文化人類学や教育学、心理学、社会学などの情報が増えるにつれ、それらの領域に特有な内容でも、適切かどうか吟味できる見識が身についてくるはずである。ここではその一助となるべく、コミュニケーション領域の研究の流れに沿って、ポイントとなる部分を解説していく。

(1) 質的研究による仮説生成

未知な部分の多い事象を研究する際には、まず面接法(インタビュー調査)や観察法(エスノグラフィ調査)などによる探索を行う。この時点では事象の正体が不明なので、測定によって数値化し、統計学的に比較することは容易ではない。ここでは、研究対象のもつ個別のデータを主観も含めて調べ上げる質的研究(定性的研究)を用いる。つまり、まずはさまざまな手段を組み合わせ、事象を詳細に調べ上げ、窪田 [1] が言うところの「アイデア集」を作るのである。それがあってによって、何をどう数値化するのか綿密に検討可能となる。逆に言うと、この段階を抜きにしていきなり大規模な調査を行おうとした場合、調べるべき項目を誤る恐れがあるため、複雑な事象であればあるほど、質的研究でしっかり探索する意義は大きい。実際には代表的な手法(グラウンデッド・セオリーアプローチ、SCAT法など)に準拠して行うことも多いものの、この目的を達成するためには研究方法を柔軟に組み立てることが特長となり、それが適切であるかは個別の判断を要する。

適切性を担保するためのポイントは複数ある。まず、量的研究で統計学的分析を行う際には、事前に定めたサンプリング手法をとることで、調査者の作為も含めた

[†] 連絡責任者: 木村祐哉 (ヤマザキ動物看護大学)

〒192-0364 八王子市南大沢4-7-2 ☎042-653-0901 E-mail: y_kimura@yamazaki.ac.jp

表1 連載企画「獣医療とコミュニケーション」記事一覧

	著者	表題	掲載号
I	堀北哲也	獣医療とコミュニケーション	75巻1号
II	山本浩通	農場を題材にコミュニケーションを考える	75巻2号
III	小沼守	獣医療のインフォームド・コンセント	75巻3号
IV	柴田正志	家畜保健衛生所の業務で必要となるコミュニケーションスキル	75巻4号
V	伊藤優真	獣医療における Shared Decision Making の可能性	75巻5号
VI	窪田健太郎	産業動物獣医療の中の心理学	75巻6号
VII	堀達也	獣医科大学におけるコミュニケーション教育の現状と課題 ～日獣大における医療面接実習の取組みについて～	75巻7号
VIII	吉田省子	リスクコミュニケーションにおける獣医師の多様な役割	75巻8号
IX	石山大	産業動物臨床におけるさまざまなコミュニケーション	75巻9号
X	松井匠作	他者のコミュニケーションをみる ―相互作用分析システム RIAS―	75巻10号
XI	水野節子	言葉のやりとりで関係が変わる, お互いが変わる	75巻11号
XII	石井一功	心の動きに気づき, 働きかける	75巻12号
XIII	今井泉	獣医師として行える支援の実践と課題	76巻2号
XIV	工藤智徳	メンタルヘルス型コミュニケーション ～誰も傷つけない誰も傷つかないために, 人間関係をどのようにしていくか～	76巻3号
XV	矢野淳	公認心理師・臨床心理士の視点から考える獣医療	76巻4号
XVI	田中圭子	継続的な人間関係の中で活かされる獣医としてのメディアーション	76巻5号
XVII	埼玉英一郎*	異なる職場にも共通するノンテクニカルスキル	76巻6号
XVIII	福山聡	養豚コンサルタントにおけるコミュニケーション	76巻6号
XIX	宮下ひろこ	小動物臨床の現場でみられるストレス要因とミスコミュニケーション	76巻7号
XX	花井睦子	“人間関係”再考今までもこれから, 人間関係はつくるもの	76巻9号
XXI	犬丸憲之*	農場 HACCP とコミュニケーション	76巻11号
XXII	水谷尚	代謝プロファイル試験の成否はコミュニケーションが握っている	77巻1号
XXIII	白戸綾子*	JGAP 畜産とコミュニケーション	77巻2号
XXIV	蒔田浩平	ワンヘルス疫学とコミュニケーション	77巻3号
XXV	赤間倫子	と畜場での防疫演習を題材にコミュニケーションを考える	77巻4号
XXVI	渡邊力生	Evidence Based Medicine (EBM) と Narrative Based Medicine (NBM)	77巻5号
XXVII	新島典子	飼育者理解の社会学 飼育者と社会をつなぐためのコミュニケーション	77巻7号
XXVIII	牧田明美	動物病院で実践したい怒りのコントロール	77巻8号

*堀北哲也との対談形式

サンプリングバイアスを回避するのに対し, 質的研究は「〇〇という事象に対してAのような反応を示す者もいれば, 逆にBの反応を示す者もある」(どちらが多い・少ないという人数の多寡はここでは問わない) ようなバリエーションを知ることが目的とするため, 調査しながら並行して分析を進め(継続的比較分析法), Aの反応という知見からBのような反応の存在が想定されたら, 意図的に探し出して調査する(理論的サンプリング, 合目的的サンプリング). 具体的に述べると, 「ペットショップで猫を購入した飼育者の意見はひととおり集まったが, 譲渡会などから猫を迎えた飼育者では全く異なる感じ方・考え方をするかもしれないので, そのような飼育者も探し出して聴取する」ようなかたちである.

こうした理論的サンプリングはサンプルサイズを事前に定めることができないため, 調査がある程度まで進み, 新たなデータを収集しても, もうこれ以上は新しい知見が登場しないという時点(理論的飽和)まで達したら終了とする. このような方法をとることにより, 少数意見も含め漏れなく抽出できるようになる. ただし, この時点では無作為にサンプリングしているわけではないため, どの意見が多数派なのかは断定できない. ここで得られた知見を元に適切な選択肢を作成し, あとに続く量的研究で確認するわけである.

質的研究では調査者による解釈を手段として用いることから, いわゆる実験器具と比べ, 当然ながらその判断にはブレが生じる. そのようなブレの対策も複数あ

り、ただ必要事項だけをメモするのではなく、その意義や背景を第三者にも理解できるように、文脈も丁寧に記録すること（厚い記述）や、多方面のデータや異なる背景を持つ調査者による分析（トライアングレーション）、調査された人物自身に解釈が適切か確認すること（メンバーチェック）などが挙げられる。これらはあくまで代表例であり、このような対策をさまざまに重ねることによって、適切性を増しているわけである。主観を扱うからといって、もし単に調査者の感想に終始しているようなものがあれば、それは質的研究としても否定されて然りである。

(2) 量的研究による仮説検証

質的研究では、どのような事象が生じうるかというバリエーションを知見として提示するが、それがどのような場面でも適切なのか、あるいはどれくらい生じるのかまでは検証できない。従来よく知られている統計学的分析は、どちらがどれだけ多いのかといったように検証することで「確からしさ」を示す。例えば、松井 [2] の紹介した Roter Interaction Analysis System (RIAS) は、医療者とクライアントの会話内容を発話ごとに区切り、どのようなカテゴリーに該当する発話が多いのか数え上げることで、会話の機能を数値化するものである。

このような観察法による研究のほか、コミュニケーションの研究でよく採用されるのは質問紙法（アンケート調査）であろう。すなわち、質的研究を元にして選択肢を作成し、あてはまる項目や程度を回答してもらうことで数値化するわけである。質問紙法としては郵送や対面での配布が一般的であるが、オンライン上に回答フォームを作成して回答を求めるケースも増えている [3, 4]。プログラミングも応用できることから、動画や音声の使用、設問の表示順のランダム化や回答内容に応じた分岐など、複雑な構成も可能である。

いずれの手段をとるにせよ、対象集団を明確に設定する必要がある。無計画に調査票を配布しているようなものでは、適切な統計学的分析が行えない。例えば、ソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS) での拡散を頼りにしたような募集方法では、類似した傾向のある者同士がつながっている傾向があって対象集団を規定できず、バイアスが評価不能となる。なお、同じくインターネットを利用した方法として、民間調査会社に登録された数万人に上る調査モニターに対するパネル調査法もあるが、こちらはの中で年齢層や性別、動物飼育など任意の条件を満たした多人数に対して無作為に調査依頼することができる点で性質が異なる。インターネットモニターに登録する者というバイアスは生じるものの、モニター規模が大きくなるにつれて、非常に有用性の高い方法として医学や心理学の領域で活用されるように

なっている。仮に動物病院やペットショップで調査をしようという場合、相当な軒数で調査しなければ、施設ごとの利用者の特徴という強いバイアスが生じることを考えれば、数万人の集団に対して無作為に配布できることの重大さがご認識いただけるであろう。

(3) 研究の循環

以上のように、未知のテーマを研究するには、まず質的研究によりどのような現象であるのか明らかにし、その「確からしさ」を量的研究で検証する。ここで得られた客観的な数値に対して統計学的解析を行って、有意な差や傾向がみられるかを確認することが多いであろう。そして、これらの結果が一般化できるかどうか、言い換えると「その他の集団にとっても妥当かどうか」を考えていくのであるが、完全一致することは当然ない。数パーセントは例外的な事例が存在するし、数値では表せていない側面に気づくこともある。そうした場合、改めてこれらの現象を質的研究で探求する。このように質的研究、量的研究が繰り返し行われることによって、段階的に真理に近づいていく循環的な流れをとる。

こうした量的研究と質的研究を別々に報告するのではなく、組み合わせることで、より情報量の多いひとつの研究報告とする潮流もあって、これは混合研究法と呼ばれている。例えば、筆者ら [5] の実施した解釈モデルに関する調査では、まず動物の病気に対する飼い主の考えを自由記述式設問で尋ね、思考パターンのバリエーションを明らかにした。その上で、それらの思考パターンがどのような回答者に該当しているのか特定し、それぞれの属性や思考パターン同士の関係性の深さを多重対応分析という統計学的手法で検証している。

このように典型的な研究としての展開のほか、現場の問題に立ち向かい、解決策を検討しながらその有効性を検証していくアクションリサーチというあり方もあるが、本シリーズ内にある吉田 [6] や蒔田 [7] の報告を再読すると、根底にある進み方は類似していることがご理解いただけるものと思う。

3 研究倫理

研究を実際に進める際（そして論文執筆する際）に、大きな障壁となるのが研究倫理の問題である。動物を対象とした研究では、動物実験ガイドラインを遵守し、また動物実験委員会の承認を受けて実施することが必要で、学術論文の投稿規定にもその旨を明記することが求められている。人間心理等の研究で倫理審査を受ける必要性はあまり認識されていないが、インタビューやアンケート調査による研究にも倫理的問題が発生する可能性があり、既に厚生労働省により施行された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」[8] の対

表2 臨床研究倫理の7要件

(1) 社会的価値
(2) 科学的妥当性
(3) 適正な被験者選択
(4) 適切なリスク/利益バランス
(5) 第三者審査
(6) インフォームド・コンセント
(7) 候補者及び被験者の尊重

象にもなっている。また、臨床研究を行う上での倫理原則として、ヘルシンキ宣言や7つの要件（表2）も知られており、これはコミュニケーション領域の研究にも当てはまる考え方なので、ポイントを絞って紹介しておきたい [9]。

(1) リスクの最小化と利益の最大化

まずは、関心のある現象を適切に評価できる研究方法を選択する必要がある。意義があると思われるからこそ研究が行われるとしても、適切な研究デザインでなければ誤った結果を導きかねず、関係者にリスクだけをもたらすこととなる。

研究における侵襲性という点、動物実験でのイメージは多くの方がお持ちであろうが、ここには被調査者の精神的な苦痛も含まれる [8]。例えば、ペットを亡くした飼い主に悲嘆について尋ねる調査は、回答するために相応の精神的苦痛を負わせるものである。どの程度の負担かという明確な基準はなく、調査内容の事前説明や匿名化などの配慮があれば「軽微な侵襲」に分類されるが、思い起こしたくないつらい体験（心的外傷）に関する質問となれば、特に侵襲性があるとみなされる。筆者らが過去に実施したペトロスの遺族調査では、調査票に自助グループ及び電話相談の告知を同封している [10-12]。また、研究する側にとっても非常に精神的負担の大きい調査となるため、調査実施者のメンタルヘルスを維持するため、スーパーバイザーをつけて実施することにも一考の余地がある。このように対処法を入念に考えておく必要があるため、軽々しく実施してはいけないことがわかるであろう。

そこまではいかずとも、調査というのは往々にして被調査者に迷惑をかけるものという意識を欠いてはならない。非侵襲的な内容であったとしても、相手にとってみれば時間をとられ、根掘り葉掘り訊かれ、ときには資料提供まで求められるのであるから、研究者側は最大限の成果を上げるべく入念な準備を心がけ、「なんとなくやる」ようなことは厳に慎むべきである [13]。

(2) インフォームド・コンセントの適切な取得

獣医療の実施にあたってインフォームド・コンセントが重要なことは、小沼 [14] も述べているとおりであ

表3 倫理審査委員会の成立要件

(1) 医学・医療の専門家等、自然科学の有識者が含まれていること
(2) 倫理学・法学の専門家等、人文・社会科学の有識者が含まれていること
(3) 研究対象者の観点も含めて一般の立場から意見を述べることのできる者が含まれていること
(4) 倫理審査委員会の設置者の所属機関に所属しない者が複数含まれていること
(5) 男女両性で構成されていること
(6) 5名以上であること

るが、これは研究でも同様である。研究を行う際には、対象者に研究内容について説明し、十分な理解のもとで協力の同意を得る必要がある。この同意は強制によるものであってはならず、同意しないことによって、暗黙のうちにも不利益を生じないことを保証する必要がある。例えば、教員の行う講義内で調査票に回答させる場面を想定してもらいたい。指導するゼミ生がやってきて、「卒業研究のアンケート調査に協力してください」と調査票を配ってまわるような光景は、特に人文系学部をもつ総合大学ではよく見られるだろう。ほとんどの場合、快く協力してもらえるのであるが、そもそも学生はこれを断ることができる状況だろうか。断ることによって成績が下がるのではないかと、その後の講義で冷遇されてしまうのではないかと心配して、嫌だとは言えない場面になってはいないだろうか。無論、そのような非倫理的なことを実際に行う教育者はいないと思われるが、匿名にして回収箱は別のところに置いておくとか、白紙で提出できるようにするといったような、安心できる状況をつくっておくことが大切である。

(3) 第三者審査の受審

不適切な研究が行われることがないように、人文科学領域でも第三者審査を受けることが必要で、すでに多くの学術雑誌への投稿時に倫理審査を受けていることが求められるようになってきている。しかし、人文科学領域の研究倫理まで扱える倫理審査委員会（Institutional Review Board: IRB）をもつ施設は希少である。そのような名称の委員会は存在していても、一般に求められる成立要件（表3）[6] を満たしていない場合も多い。正規の倫理審査を受けられなければ、研究あるいは投稿ができず、この領域の発展は期待できまい。そのような状況を鑑みて、このたび獣医コミュニケーション研究会では倫理審査委員会を設置した。厚生労働省のデータベース（臨床研究倫理審査委員会報告システム）で登録情報も公開されており（IRB番号：24000080）、施設外審査を受けることが可能である。

倫理審査には不適切な研究を止める防波堤の役割があ

ることから、厳しいものというイメージが強いかもしれないが、審査を通じて改善点のアドバイスも付されることから、より良い研究にブラッシュアップするための社会資源という意味合いもある。優れた科学的根拠を生み出すために、ぜひ有効活用していただきたい。

4 最 後 に

近代における医学教育の基礎をつくりあげ、臨床医学の父とも称される William Osler は、「医療はサイエンス (科学) に基づいたアート (医術, 技) である (The practice of medicine is an art, based on science)」という言葉に表れているように、疾患の診断や治療などの自然科学的な知見だけではなく、それを目の前の患者に適用するためには、コミュニケーションも含めた人文科学的な知見が必要と早くに見抜いて、これらを連携させることの重要性を繰り返し述べている [15]。本稿そして本シリーズを通して、「わけのわからないもの」ではなく、これからの獣医療に求められる新しい領域として、コミュニケーションのあり方に関心を抱いていただければ幸いである。

引 用 文 献

- [1] 窪田健太郎：獣医療とコミュニケーション (VI) 産業動物獣医療の中の心理学, 日獣会誌, 75, 257-261 (2022)
- [2] 松井匠作：獣医療とコミュニケーション (X) 他者のコミュニケーションをみる —相互作用分析システム RIAS—, 日獣会誌, 75, 486-492 (2022)
- [3] 康永秀生, 井出博生, 今村知明, 大江和彦：インターネット・アンケートを利用した医学研究 本邦における現状, 日本公衆衛生雑誌, 53, 40-50 (2006)
- [4] 三浦麻子, 小林哲郎：オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究, 社会心理学研究, 31, 1-12 (2015)
- [5] 木村祐哉, 真田菜生, 今井 泉, 小沼 守, 宮下ひろこ, 矢野 淳, 伊藤直之：動物診療施設を受診する飼い主が抱く解釈モデルの質的研究, 日獣会誌, 72, 349-355 (2019)
- [6] 吉田省子：獣医療とコミュニケーション (VIII) リスクコミュニケーションにおける獣医師の多様な役割, 日獣会誌, 75, 384-389 (2022)
- [7] 蒔田浩平：獣医療とコミュニケーション (XXIV) ワンヘルス疫学とコミュニケーション, 日獣会誌, 77, 141-143 (2024)
- [8] 厚生労働省：人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針, (<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/kenkyujigyou/i-kenkyu/index.html>), (参照 2024-07-10)
- [9] Emanuel EJ, Wendler D, Grady C : What Makes Clinical Research Ethical?, JAMA, 283, 2701-2711 (2000), (DOI: 10.1001/jama.283.20.2701), (accessed 2024-07-10)
- [10] Kimura Y, Kawabata H, Maezawa M : Psychiatric Investigation of 18 Bereaved Pet Owners, J Vet Med Sci, 73, 1083-1087 (2011)
- [11] Kimura Y, Kawabata H, Maezawa M : Frequency of Neurotic Symptoms Shortly after the Death of a Pet, J Vet Med Sci, 76, 499-502 (2014)
- [12] 木村祐哉, 金井一享, 伊藤直之, 近澤征史朗, 堀 泰智, 星 史雄, 川畑秀伸, 前沢政次：ペットロスに伴う死別反応から医師の介入を要する精神疾患を生じる飼主の割合, 獣医疫学雑誌, 20, 59-65 (2016)
- [13] 宮本常一, 安溪遊地：調査されるという迷惑 —フィールドに出る前に読んでおく本, 増補版, 1-150, みずのわ出版, 山口 (2024)
- [14] 小沼 守：獣医療とコミュニケーション (III) 獣医療のインフォームド・コンセント, 日獣会誌, 75, 111-114 (2022)
- [15] Osler W : 古き人文学と新しい科学, 平静の心 —オスラー博士講演集, 日野原重明他訳, 新訂増補版, 521-582, 医学書院, 東京 (2003)